

1 実践内容

これまで、「奈良県小学校教科等指導資料」や「小学校国語教材『古典に親しもう』DVD」（奈良県教育委員会）、「奈良大好き世界遺産学習」（奈良市教育委員会）などの作成に関わってきた。郷土の文学「万葉集」や世界文化遺産である「能」を題材にした伝統的な言語文化の授業づくりの研究に取り組むなど、国語の授業づくりに関する執筆を行った。



(1) 伝統的な言語文化の学習

現行の学習指導要領では、伝統的な言語文化に関する指導の重視が挙げられている。創造と継承を繰り返しながら形成されてきた伝統的な言語文化に親しませて、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるようにという内容である。中学年では、「易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語などを取り上げること」が示されている。奈良県には、『万葉集』や『古事記』や『古今和歌集』などの勅撰和歌集で触れられたり歌われたりしている素材が身近に豊富にある。そこで、中学年の指導の際には、伝統的な言語文化の学習を積極的に取り入れてきた。

具体的には、3年生の児童には、奈良にちなんだ「俳句」を、4年生の児童には、万葉集の「短歌」の学習を取り入れ、子どもたちが自然に俳句や短歌の世界に慣れ親しんでいけるように、様々な音読の工夫を行った。例えば、動作を付けて読んだり、五音七音のリズムを味わいながら読んだり、音ごとに読み手が代わる読み方をしたり、手拍子や抑揚を自由につけながら読んだりすることで、児童が主体的に学び、協働的に学びを深める機会を多く作ることを心掛けてきた。授業の中で児童と一緒に、色々な音読の仕方を考えると児童の関心もさらに高まっていったように思う。

また、児童に短歌や俳句の意味を理解させずに音読させることで、児童が自分の体験の中から意味を推し量り（想像し）、創造する力を育むことができた。例えば、短歌の学習で奈良県の地名が登場する短歌「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見つ」の学習を行った際、児童が「この人吉野のこと自慢している。良い人は、ちゃんと見なさいってことかな。」と発表した。単なる音読だけでは、このような表現に行き着くことができなかつたと思われる。私自身も、児童一人一人の個性豊かな表現に触れることができた。



『古典に親しもう』

DVD (奈良県教育委員会)より

(2) 昨年度の取組（「ごんぎつね」「お願いやお礼の手紙を書こう」東京書籍四年）

「ごんぎつね」の学習では、場面ごとに学習課題を設定し、学習課題について自分の考えや意見を整理する個別学習の時間を設けた。その後、グループや学級全体での意見交流を行い、一人一人が学習課題に対して視野を広げ、新たな気付きなどを得る活動の場とした。そして、再度自分と他者の考えを比較・整理し、自分の考えをまとめる活動を行った。児童一人一人が主体的・協働的に学ぶ力を育む学習活動を追究することができた。

「お願いやお礼の手紙を書こう」の学習では、社会科の学習と関連させ奈良県内の全市町村に、自分が調べたい事柄を詳しく知るため資料送付を依頼する手紙を書いた。相手に自分の要件を伝えるために手紙を出すという目的を明確にし、失礼のないように、敬体などの丁寧な表現を用いながら手紙を書いた。その後、各市町村から届いた資料を参考にして、市町村を紹介する新聞を書き上げた。最後に、資料を送っていた市町村にお礼の手紙を書いた。お礼の手紙には、資料送付のお礼だけでなく、自分が学んだことや郷土に対する思いも書き加え、自分が書いた市町村を紹介する新聞と一緒に郵送する活動を行った。この活動を通して、郷土を大切にしている各地域の思いを受け取ることができた。

2 成果及び課題

伝統的な言語文化の学習では、児童が興味・関心をもつ素材が重要であり、自然と古典の世界に慣れ親しんでいくような工夫も必要である。郷土奈良を意識しながら、地域に根差した教材の開発を今後も続けていきたい。

「ごんぎつね」の実践では、「課題作り・話し合い・自分の考えの深まりを得る」という学習形態を計画的・継続的に取り組むことで、児童自らが個別学習に取り組み、進んで発表したいという意欲につながったように思う。また、児童一人一人が課題を解決するために深く思考したり、言葉を手掛かりに判断したりすることの重要性を改めて感じることができた。

「お願いやお礼の手紙を書こう」の実践では、実際に奈良県内の全市町村に依頼の手紙を送付し、ほぼ全部の市町村から返事が返ってきた。児童は、自分たちの学習に沢山の方が協力していただいているという思いに感激し、送られてきた複数の資料から必要な情報を精選し、懸命に新聞を書いている姿が印象的であった。また、そのようにして書き上げた新聞のコピーでも良いので、自分の手元に保存しておきたいという児童が多数見られた。郷土に対する思いがより深まった。

今後も国語科のみならず、各教科等における習得・活用・探究の学習過程全体を見渡しながらか、次期学習指導要領で重要視されているアクティブ・ラーニングの「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の三つの視点に立って学び全体を改善することを考えていきたい。また、子どもたちが各教科等の内容的な理解を深めながら、育成すべき資質・能力を身に付けていけるように研鑽を積んでいきたい。

3 その他参考となる事項

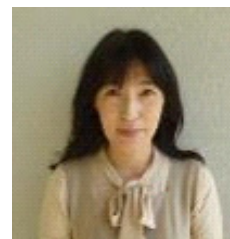
参考文献『小学校四年 新しい国語の授業』（東洋館出版社）

音楽を愛する心を育て、共に学び高め合う集団をつくる「チーム東小」の取組

生駒市立生駒東小学校 教諭 荒川 真弓

1 実践内容

数年前、集会で話を聞く態度や授業中に落ち着きがない子どもの姿が多く見られた。子どもたちを変えていくにはどうしたらいいのか非常に悩んだ。音楽専科として子どもと関わることのできる授業を大切に、もっと質の高い授業にしなければならないと考えた。そこで、音楽学習を通して、心を育て、なかまとのつながりを大切に、共に生き生きと学び高め合う子どもの姿を目指した。本校では目標の一つに「音楽を愛する心を育てる」を掲げ、子どもが自尊感情をもてるようになる「音楽の力」を信じ、子どもの「生きる力」を育むことを目指して学校全体で取り組んでいる。



(1) 人を育てる ～学習活動の中で～

合奏、合唱の取組は集団の中で支え合うことから始めている。「よく聴く」「なかまと共に」「一生懸命」「くつや椅子をそろえる」「あいさつをする」「人や楽器などの物を大切にする。」「遊びと学びの違い」など、当たり前なことを丁寧に学習活動の中で気付かせながら人としての成長を促すように取り組んでいる。

(2) 全校で取り組む音楽活動 ～音楽集会・音楽会～

全校で一つの音楽をつくる体験を通して協働する喜びを感じさせると同時に、家庭や学校生活の中に音楽を定着させたいと考えた。音楽集会では、低学年が高学年と歌うことで低学年の授業では感じることのできないハーモニーを体感させることができ、低学年の子どもたちにとっては、豊かな音楽体験の一つとなっている。音楽会では、他学年の良さを認め、学び合いながら、なかまと共に力を合わせ一つの目標が達成できたという体験や感動が、子どもたちの感性を育て表現力を高めている。また、音楽会に地域の老人クラブの方を招待することで、地域や保護者の方に小学校の音楽教育を理解し協力してもらえる最良の機会となっている。

(3) 交流授業で学び合い ～あこがれの高学年に～

学校全体の音楽の活性化に向けて、高学年には低学年にも関わりをもつように取り組ませている。その一つに高学年と低学年の交流授業を設定している。高学年は低学年に音楽の楽しさを伝えようと意欲的に学習に取り組み、低学年は高学年の響きある声や演奏にあこがれ、音楽の楽しさ、すばらしさを学んでいる。



- | | |
|-------------------------|------------------|
| 1年生と4年生・・・はじめまして出前コンサート | (歌、ハンドベル、リコーダー) |
| 音楽物語「11ぴきのネコ」 | (歌、せりふ、グループ合奏) |
| 2年生と6年生・・・スプリングコンサート | (歌、リコーダー、箏合奏) |
| 3年生と5年生・・・リコーダー出前コンサート | (歌、リコーダーのミニ先生体験) |

(4) 歌声づくり・音楽の体現化 ～授業づくりの工夫～

低学年は担当学年ではないが、朝の学習の時間に全校音楽の曲を指導したり、音楽会の指導時期に入り込みとして発声指導をしたりしている。このように音楽を「楽しむ」基礎となる「歌声づくり」など表現技能を高める工夫や、心で感じたことをのびやかに体現化できるように体を使った表現を体験させる工夫をしている。6年生では3学期に小学校最後の音楽学習のまとめとして、リーダーを中心に合奏や合唱を作りあげていく。思春期の入り口にさしかかった子どもたちに、合唱に合わせてダンスを創作させる。今までの経験の中で思いを体現化してきた積み重ねもあり、最後にはクラス全員の心を一つにして心弾む音楽を表現できる。

児童の主体的な活動として4年生では「音楽物語」、5年生では「東小太鼓（和太鼓創作）」などのグループ活動による創作活動にも取り組んでいる。



(5) ゲストティーチャーから学ぶ ～地域とともに～

音楽を身近に感じ、音楽の楽しさを体感、実感できる機会として箏・和太鼓体験学習、バイオリン・金管アンサンブル・ゴスペルコンサートなど地域のゲストティーチャーを招いて、生の楽器の音色や歌声、日本の伝統文化に触れさせている。音楽を楽しむ、「音楽の力」を伝える活動を積極的にされているゲストティーチャーの方々との出会いが、子どもたちの宝となり、音楽の魅力をより感じさせることのできる機会となっている。

(6) 学級担任との連携 ～チーム東小～

連絡ノートなどを活用し、「子どもを共に育てる」という共通理解のもと、全職員が協力、連携して指導している。また、教室でも歌唱や器楽の練習ができるように、CDを各クラスに配布している。音楽会や集会では、教師集団自ら音楽に親しむ姿を子どもたちに示し、学校全体で音楽を通して一つになる楽しさを感じさせている。

2 成果及び課題

教師集団の連携指導と協力の成果として、子どもたちの集会や授業での聞く（聴く）態度は少しずつ改善され、目標をもって自主的に取り組むことができる子どもが増えてきた。子どもたちが自ら学ぶ意欲をもち、なかまと共に目標を明確にし、本気で取り組むことができれば、質の高い学習活動を展開することができると確信した。また、取組を継続することによって、各教室から歌声や楽器の音が聞こえてくるようになり、音楽を通して子どもの笑顔に出会えることも増えてきた。

課題として、多種多様な子どもの実態に寄り添いきれず、十分に心を開くことができない子どももいる。なかまと共に取り組む喜びを感じさせながら、集団の質を高いものにすることを目指し、今後も子どもの実態に沿った教材や指導の研究に取り組み、教師集団一丸となって進めていきたい。

3 その他参考となる事項

生駒東小学校ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/>

1 実践内容

昨年度・今年度と担任した学年は、入学時から課題の多い学年で、毎年多くの教員が携わり、学校全体で指導にあたってきた集団である。特に一昨年度は児童と教員のコミュニケーションがうまく取れなくなり、関係機関の支援を必要とする状況であった。また、学力的にも担任一人では授業を円滑に進めることも難しい程であった。



昨年度の1学期はまず「クラスマネジメント」に力を入れた。2年生で担任していたこともあり子どもたちとのコミュニケーションは、4月当初から比較的良好であったが、子どもたちからは学校に対する不信感や自分に対する自信のなさがうかがえ、何事にも消極的であった。

子どもの意識を高めることができれば学級が変わる、そしてその意識の基盤を築いているのが自尊感情だと考えた。そこで、自尊感情の向上のために重きを置いたのが「生徒指導の三機能」と「P D C Aサイクル」の活用である。

三機能とは、「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的人間関係を育成する」という流れをもち、自己指導能力の育成を図るためのものとされているが、自尊感情の向上にも適していると考えた。自分で決めて実行したことを評価されることで自信をもつことができ、また互いに認め合うことで人に尊敬の念をもつこともできる。また、その流れをもった活動を、ルーティン化されたP D C Aサイクルの上で実行すると、子どもたち自身で互いに自尊感情を高め合うことができると考えた。

これらの実践のために設定した場が、「自主学習」と「奉仕作業」である。どちらの活動も自主的に行うべきものなのだが、子どもたちに全てを委ねてしまうと、活動のイメージをもつことすら難しくなる。そこで、スムーズに取り組めるよう担任が環境やシステムを整える必要があった。以下がその流れである。

(1) モデルロールの提示・計画・実行 (P l a n・D o / 自己決定の場を与える)

まずはモデルロールの提示である。手本を示すことで子どもたちはイメージをつかみ、自分で一週間の計画を立てることができる。また、手本どおりにすることで確実に教師から評価され、次の自主的な活動につなげることができる。

(2) 評価・自己評価・振り返り (C h e c k・A c t i o n / 自己存在感を与える)

評価は子どもたちを随時観察し、個々にあった内容で自己存在感を感じることができるようになる。また学校全体の共通認識が重要で、担任以外から褒められる機会を設けることで、子どもたちは喜びや達成感をより味わうことができ、意欲や自主性の向上にもつながる。

日	活動	時間	場所	振り返り・感想
月	先生の悩み	8:10-8:25	10:30-10:45	★ ★ ★ ★ ★
火	教室			★ ★ ★ ★ ★
水	先生の悩み	あつ、はつち		★ ★ ★ ★ ★
木	かいたん	はつち	先生の悩み	★ ★ ★ ★ ★
金	黒板	宇とけ		★ ★ ★ ★ ★
土・日・祝	家	おてっ		★ ★ ★ ★ ★

活動後はシートに自己評価と振り返りをさせる。振り返りは自分へのメッセージや

アドバイスを書かせ、メタ認知や活動の改善につなげる。また、そのメッセージに返答する形で担任からの評価も行う。

(3) シェア（共感的人間関係を育成する）

個々の「がんばり」を伝え合う場を設けたり、友だちの良いところをメッセージカードにして伝えたりする活動を行う。これは互いに認め合ったり、競争心や向上心を育んだりする場となる。



昨年度はこの活動を通年行うと共に、取組について職員会議で報告し、全教職員の理解と協力を得て子どもたちの内面からの変容を試みた。

2 成果と課題

子どもたちは何事にも落ち着いて取り組むことができるようになった。それに下級生が本学級の真似をし出すなど、学校全体の規範意識にも良い影響を与えている。またQ-U（学校における児童生徒の意欲や満足度を把握する調査）の結果では、6月は20%の児童が学級生活不満足群だったのが、12月にはそれが0%となり、全体の95%が学級生活満足群に移行した。これは互いに認め合うことができているからで、自尊感情の向上の裏付けとも言えるだろう。

しかし、これはまだ子どもの基盤づくりの段階である。本年度も、この活動を発展・継続しながら、学力や社会性を向上させる取組を学校全体で行っているところである。この取組が実を結び、子どもたちの自尊感情が向上した状態で平素の学校生活を送ると、児童や学校はどのように変化していくのか、楽しみなどところである。

3 その他参考となる事項

北宇智小学校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/kitasho/>

1 実践内容

(1) 児童の実態と取組のねらい

近年、子どもたちを取り巻く多種多様な生活環境によって、子どもたちの体力低下や運動する機会の減少が危惧されている。本校のある白檀町は高齢化率が非常に高く少子化が進み、友だちとの帰宅後の外遊びや社会体育の場がなくなりつつある。そのような中で、自分の考えを相手に伝え、ともに協力して行動する力に欠ける児童が多い。体育の学習は、教室での他の教科学習に比べ、子どもたちの本音のコミュニケーションの場がたくさんあり、その場その場で、お互いの意見をぶつけ合いながらたくましく成長できる機会である。そこで本校では、体育学習を中心として、児童のコミュニケーション能力の育成を目指したいと考える。体育の学習では、「ゲームで勝ちたい。」「この技ができるようになりたい。」など一つの目的に向かってコミュニケーションを取りながら進めていくことができる。ゲーム形式の活動の中で、一人一人が考えをもち、伝えあう場面を設定することで、児童が互いの思いを共有しあい、ともに伸びていこうとする意識を育てたい。各学年、年間計画の中でボール運動やゲームの領域では、合同体育の時間を設定し、発達段階の違う異学年と関わりあうことで互いを尊重し、多様な人間関係を作っていくことができると考える。児童が互いを認めあい大切に思えるような活動をしかけることで、コミュニケーション力（自分の考えを伝える・お互いの考えや気持ちを理解する力）を付けていきたいと考える。



(2) 体育授業での取組

S F F（白檀南フラッグフット）を楽しもう！ 5・6年合同体育

① オリエンテーション

今回、ボール運動に関する合同体育は、初めての取組である。どちらかといえれば自分の意見や考えを伝えることが苦手な6年生と、聞くことが苦手な5年生がしっかりとコミュニケーションをとり、ゲームを行っていくことをテーマとした。

② ドリルゲーム&タスクゲーム

基本的な動きや作戦を例示し、チームの特長を生かす練習や作戦を選び、話合いの時間を確保しながら取り組んだ。体育の授業である以上運動量も重要となるため、動きながらコミュニケーションをとることをすすめ、運動量の確保を行った。タスクゲームを通じて、児童はパス中心なのかラン中心なのか自チームの特性にあった攻撃の仕方を考えながら取り組んだ。



(3) S F F リーグ戦&対抗戦

チームの中で児童は作戦を相談しながらゲームを進め、その中でお互いにコミュニケーション（チームの中での合言葉や友だちに対する声かけなど）を取りながら、力を合わせてタッチダウンを目指すことの楽しさを味わわせることを中心に指導を進めた。また、チームの中の作戦で一人一人の役割を大事にすることや、ゲーム中の声かけや互いに励まし合うことといった、全員が笑顔で気持ちよく取り組める雰囲気づくりを行った。

リーグ戦ではルールづくりを中心に、対抗戦では作戦を考えることを中心に取り組んだ。児童は基本のルールに自分たちの考えたルールを追加しゲームを行った。5・6年の枠を取り払い、積極的に意見交換を行う姿がたくさん見られた。1回戦総当たりのリーグ戦を通して白樫南オリジナルルールが確定した。そして、リーグ戦の順位の下位のチームから対戦相手を指名し、対抗戦を行った。対抗戦では、前半と後半の間のハーフタイムの時間を有効に活用し、自分たちの特長に加え、相手の特長もとらえ後半に修正できるチームが増えてきた。

2 成果と課題

5・6年合同体育「フラッグフットボール」の実践では、振り返りカードや授業後の感想を見ると、どの児童もフラッグフットボールを楽しみ運動に親しむことができたと思う。特に、ボール運動が嫌いと事前アンケートに消極的な意見を書いていた児童が、作戦を考えるチームの話合いではリーダー的な役割を果たしていた。また、ボール扱いが苦手な児童も、ドリルゲームやタスクゲーム



を通して、パスを受けて、ボールを持って走るという基本的な動きを身に付けることができ、タッチダウンを決めるなど、積極的に参加して活動を楽しむことができた。その要因となったことは、単元を通して、チーム内でのコミュニケーションを大切にしながら取り組んだことである。運動に自信がなく消極的な児童は、「どんまいどんまい！」とか「OK、ナイス」等の声をかけてもらうことでどんどん積極的にフラッグフットボールに参加することができた。また、自己中心的に自分の運動能力だけでプレーしていた児童も、自分がおとりとなってボールを持ったふりをして走り、敵をひきつけ味方がタッチダウンを決める作戦がうまくいくと自分のことのように喜んでチームの雰囲気がよくなるということも多々見られた。また、4コート作成して、セルフジャッジでゲームをすすめたが、ルールづくりの段階からしっかり話合いが行われていたため、判定でもめたり中断したりすることもなく、スムーズにゲームが行われ、児童の運動量もしっかりと確保できた。さらに、この取組で、3学期のサッカーの授業においても、ゲームとゲームの間の時間に、自分たちで作戦タイムを設けて話合い活動を積極的に行い、後半戦に成果を出すことができていた。振り返りカードに、友だちからの温かい声かけやアドバイスがあるといつも以上に体が動き、失敗を恐れず積極的に活動できるという意見が多く書かれていて、なかまとのコミュニケーションが、体を動かすことに大きな影響を与えるということを実感した。

分野番号3 小学校 学校体育の部

体育主任として進めた、学校全体での体力向上の取組について

香芝市立鎌田小学校 教諭 中島 大輔

1 実践内容

本校に赴任して3年目（平成18年度）から、体育主任を務めることになり、本校児童の体力面の課題を解決していくために、体育科授業や体育的行事、休み時間等を利用した体育的活動の工夫と充実に努めてきた。本校は開校当時から、体験的な学習を通して豊かな人間性と確かな実践力を育む教育を進めている。特に栽培活動が盛んで、力を入れている。そのような中で、体を動かすことの楽しさを感じられる児童を育成し、結果として体力向上につながるよう、職員の理解を得ながら、体育主任として取組をリードしてきた。



(1) 体育的活動の充実

学校全体として、体を動かすことが好きな児童、休み時間に積極的に運動する児童を増やし、さらに活気のある学校にしたいと考え、全校での体育的活動の工夫と充実を図った。

① リズム縄跳びの開始【H19～】

体力テストの結果から、本校児童の跳ぶ力に課題があることが分かり、3学期の全校朝会では全校で縄跳びを毎週行うことにした。音楽に合わせて約5分間決められた跳び方で跳ぶ。運動場には手作りのジャンピングボードを設置すると、子どもたちに大人気となり、休み時間に縄跳びをする児童が大幅に増えた。

② 水泳教室の開始【H20～】

25mを泳ぎ切れない5・6年生児童を対象に参加を募り、夏休みに水泳教室を始めた。教員の大半が指導にあたり、少人数指導の効果的な教室になった。

③ 外遊びタイムの開始【H21～】

運動の二極化が問題視されてきたが、本校でも同様で、休み時間に外へ全く出ず、体を動かさない児童が見られた。そこで、毎週火曜日の業間休みには、必ず運動場に出て遊ぶことにし、学級遊びや自由遊びを行った。体を動かすことの楽しさを感じるきっかけとなるよう、運動委員会から遊びの紹介等を行ってきた。

④ マラソン大会の復活【H23～】

赴任前から本校では道路事情の変化のため、マラソン大会がなくなっていた。かけ足は行ってはいたものの、児童には明確な目標がなく、意欲的にかけ足に取り組むのが難しいようであった。そこで、コースの設定など大きな労力を要したが2年がかりの準備で実施に漕ぎ着けた。近隣校の体育主任からの情報や保護者の協力を得て、マラソン大会を盛大に復活できたのは、体育主任としての自信にもつながった。



(2) 体育科授業の充実

平成21年に県でも体力向上が教育課題の一つとなっていた。そこで、体育主任として本校児童の体力向上を見据えた体育科授業の充実を目指した。

① 子どもの体力向上指導者養成研修（独立行政法人教員研修センター）【H21】

長野県にて計4日間の研修に参加。主にゲーム・ボール運動領域の研修を行った。その後、伝達講習の講師を数回務め、体育科の授業づくりについて研鑽を積む機会を得た。



② 市・県の小学校体育研究会での授業研究や実践発表【H21・24】

ボール運動ゴール型「タグラグビー」と「ハンドボール」の授業公開、実践発表を行った。ルールの簡易化と場の工夫によって、身に付けさせたい動きを引き出すことを目指した。

③ 保健体育課の体力向上推進コーディネーター【H25・26】

県立教育研究所に勤務し、県内の小学校へ赴き出張授業や職員研修を行ったり、多くの講座や実技講習会を行ったりする中で、学校体育の充実や体育科の授業づくりをより詳しく研究する機会を得た。また、県内の小学校に配布しているDVD（明日から使える体育学習「体力向上モデルプラン集」）や資料（エンジョイ！ラン&ジャンプ！「走・跳の運動事例集」）の作成にも携わった。

2年間勤務した後、再び本校に戻り、経験を生かして特に最近増えてきている若手教員に体育科の授業づくりを伝えることに努めている。

2 成果及び課題

体育主任を務めてから10年が過ぎるが、始めてきた様々な取組が、本校の教育活動の中にしっかりと位置付いている。全校での大きな取組だけでなく、体育授業や体育的活動における細かな考え方や実践が確実に広がってきているのも実感している。運動場で遊ぶ児童が増え、体力テストでの県平均を上回る項目の割合が増えるなど、目に見える形で成果が表れてきている。しかし、本当に運動好きな子どもを育て、生涯にわたって運動を楽しむ資質が身に付いているかどうかの検証が必要であり、今後は更に体力テストの結果を分析し、本校児童の課題を克服するような取組を進めていく必要がある。そして、体力向上推進コーディネーターという貴重な経験を生かし、より充実した体育科の授業を校内外に広めていきたいと考えている。

3 その他参考となる事項

香芝市立鎌田小学校ホームページ

<http://www.city.kashiba.lg.jp/eschool/category/22-7-0-0-0.html>

県立教育研究所ホームページより なら“先生の蔵”～授業のための教材・教具集～
体育・保健体育 <http://www.nps.ed.jp/nara-c/gakushi/kura/>

金管バンドクラブの指導について

五條市立五條小学校 教諭 徳本 義和

1 実践内容

五條小学校の金管バンドクラブは、1984年のわかさ国体が開催される年に創部された伝統あるクラブである。以前勤務していた学校で金管バンドの指導を始め、人事異動で4年間バンド指導からは離れていたが、バンド指導をしたいという強い思いがあり、本校着任以来、金管バンドクラブの指導をしている。



学校の実情等も加味し、初年度からバンド運営の改革を図り、「感動を与える音楽」をテーマに取り組んできた。

まず改革の手始めに、練習時間の確保に取り組んだ。本校では、異学年、同じ地域での児童同士の交流を活性化させるためにも、昔から分団登校を続けている。その体制を崩さないように、毎週火曜日・木曜日・金曜日の3日間、午後4時から4時45分までを練習時間とすることにした。当初、まずは大きい音を出せるようにと、基礎練習に明け暮れる毎日であった。しかし、子どもたちにとって基礎練習は退屈で楽しくない練習であり、モチベーションが下がることもあった。運動会等の学校行事で金管バンドが演奏する機会があるので、行進曲や校歌等の伴奏の練習を開始すると、モチベーションも上がり楽曲も何とか通せるようになり、本番を迎えることができた。しかし、指導者からすると「音を大きく出せていない。」「演奏がいまいちまとまらない。」などの課題が見えてきた。子どもたちと指導者の間で、バンド活動に対する意識の差があるように思った。そこで、演奏する曲の参考音源と自分達の演奏を録音したものを聞き比べさせたり、バンド指導の先輩の先生に直接指導してもらったりして、『こんな音をだせるようになる。』という目標をもたせた。始めは、「これは無理。」「自分達はこの演奏している人とはレベルが違う。」などのネガティブなイメージをもち、モチベーションが上がらない時期があったが、反復練習を繰り返し、何度も伝えることで少しずつであるが、「できるようになってきた。」と子どもたちが実感するようになった。

本校でバンド指導を始めて2年目、奈良県小学生バンド連盟より、2013年、2014年の「全国小学校管楽器合奏フェスティバル 西日本大会」への出場の機会をいただいた。この舞台に出演することは子どもたちにとってももちろん嬉しいことであるが、西日本各地から集まる小学校の演奏を聴くことは、子どもたちにとってとても良い刺激になり、子どもたちの意識が変わっていくのを感じた。2015年には「2015 JAPAN BAND CLINIC」の小学校指導者講座のモデルバンドをさせていただき、たくさんの指導者の前でプロの先生による指導を受けたことで、さらに子どもたちの自信が高まっていた。今年は、「全日本小学校金管バンド選手権」の音源審査を通過し、12月23日に行われる全国大会に出場する。

たくさんの舞台を経験することで、たくさんの方々に子どもたちの活動を知ってもらえるようになった。今では、日々子どもたちを見守ってくださる地域の方々へ感謝の気持ちを込めて、毎年3月には地域の商業施設の土地をお借りして「ふれあいコンサート」

を実施したり、老人ホームの落成式での演奏、自治連合会主催の「ふれあいの集い」等で演奏させていただいている。このような取組は、学校の様子を知っていただくだけでなく、“地域の子どもを地域で育てる。”という思いにもつながっていると思う。



また、毎年夏休みには、同じ活動をしている子どもたちとの仲間作り、バンドのレベルアップをねらいとして市内の野原小学校との合同練習を実施している。昨年度からは、宇智小学校も参加している。合同練習では、複数の指導者から多様なアドバイスを受けることになり、子どもたちの視野は広がり、多様な感覚をもつことになる。さらに、市立体育館竣工行事として奈良フィルハーモニーや中高校生と共に演奏する『五條市バンドフェスティバル』を市教育委員会が企画してくださった。今年の夏休みに、1回目の合同練習を五條高校で行った際、200人を越える人数の音に子どもたちは圧倒されると同時に、生き生きと活動する様子が見られた。

バンド指導では、音楽の楽しさを体験させることはもちろん、子どもたちは一生懸命取り組むことで、努力することの大切さを感じ、しんどいことにへこたれずに挑戦し続ける忍耐力が養われ、それらを継続したことで『できた喜び』をたくさん味わってきた。努力したことで味わった喜びは、自尊感情の高まりにつながっている。音楽活動に特化した力だけでなく、子どもたちの実生活に必要な力をバンド活動で育て、社会に出たときにしっかりと自己主張をできる人間に育てて欲しいという思いを持ち、今も指導にあたっている。

2 成果と課題

- (1) 演奏技術が上がるにつれ、子どもたちも自信をもって取り組むようになってきた。それに伴い、各方面からの出演依頼も増え、結果的に五條小学校金管バンドクラブの活動がたくさんの方々を知っていただけるようになった。応援やお褒めの声をかけていただくことは、子どもたちのやる気を奮い立たせる良いきっかけとなっている。
- (2) 金管バンドクラブに所属する子ども達が、各クラスでも模範となり学校全体の規範意識の向上につながっている。また、全校児童の前で演奏を披露することにより、メンバーの自尊感情の向上、他の子どもたちの『あこがれ』的な存在として、一生懸命取り組む気持ちをもつことを促すきっかけとなっている。
- (3) 他校との交流をする中で、良い意味での競争心を喚起し、五條市のバンド活動、音楽教育の活性化につながっている。また、保護者の方々が、他校の練習の様子を見たり演奏を聴いたりすることで、バンド活動に対する期待が高まり、活動にもより積極的、協力的になってきている。
- (4) 五條市の音楽をやりたい子ども達に、どのように機会を与えていくか。他校との連携をより一層深めて、より質の高い指導ができる体制を作っていきたい。
- (5) バンド指導と聞くと、特別な技術が必須だと思われがちで、バンド指導に取り組んでくれる人員が少ないのが現状である。指導人員の確保、育成が課題である。



3 その他参考となる事項

五條市立五條小学校のホームページ

<http://www.gojo-nar.ed.jp/gosho/>